

□全体研究会

① “China’ s Rise: East Asia and Beyond”

講 師 : Peter Katzenstein 氏 (The Walter S. Carpenter, Jr. Professor of
International Studies, Cornell Univeristy)

日 時 : 2008 年 4 月 16 日 (水) 18:00-20:00

場 所 : 慶應義塾大学三田キャンパス 大学院校舎 8 階 東アジア研究所共同研究室 1

言 語 : 英語

報告要旨：中国の台頭は東アジアと世界にどのような影響を与えるのか。中国の台頭は最近アメリカや日本でも話題になっており、多くの学者達がさまざまな観点から分析している。Katzenstein 氏の今回の報告は歴史的な観点から中国の台頭を考察したうえで、新しい概念的枠組みを構築するための試みであった。

Katzenstein 氏は中国の台頭がグローバル秩序にもたらすのは、決裂 (rupture) よりも、旧と新の再結合 (recombination) になると主張する。その理由として、三つの要因をあげた。第一に、経済面で中国が将来的にグローバルな最強国になったとしたら、それは過去の中国の国際的地位の回復にすぎず、グローバル秩序の決裂にはつながらない。第二に軍事面では中国危機論が高まっているが、歴史的に中国の台頭は東アジアの平和と安定に貢献してきた。そのため中国の軍事発展もグローバル秩序の決裂につながらない可能性が高いとみてよい。第三に、文化面でも、中国の台頭によって世界文化が一変されるより、むしろ中華文化と世界のさまざまな文化が融合していく可能性が高いと見られる。従って中国の台頭がグローバル秩序にもたらすのは、決裂よりも旧と新の再結合 (recombination) である可能性が高い。

では、中国の台頭をどのような概念的枠組みで理解するべきであろうか。Katzenstein 氏が提案する新しい概念的枠組みは「中国化 (sinicization)」である。中国化は一方通行ではなく、相互作用的である。つまり、中国は世界に影響を及ぼす同時に世界からも影響される。「中国化」は国際化やグローバル化も現実に近い概念であると Katzenstein 氏は主張する。

報告後行われた質疑応答では「中国化」という概念的枠組みの具体的内容について質問が集中した。また「中国化」は双方向性であるとしたら中国のどのような側面が「中国化」の過程で存在し続けるかという質問もあった。これに対して、Katzenstein 氏は、世界各国に居住する中国人の存在を「中国化」の一つの基本的要因だと指摘した。ほかにも日本と中国の経済発展についての比較、北京コンセンサスなどに関するコメント・質疑が多数行われた。